

ブダペストの空気

ながの やすひこ
長野 泰彦
民博民族文化研究所

ブリュッセルでの会議の帰途、ブダペストを訪ねる機会をえた。わたしはチベット言語学を専門としているのだが、なぜブダペストか。ひとつは、私淑した言語学の恩師、徳永康元先生が一九四〇年代に二年半を過ごした場所であること。もうひとつは、欧州で初めてのチベット語文法を書いたケーレシユ・チヨマ・シャーンドルがハンガリー出身だったからだ。

ウラル学者で、マルチな才の文人

徳永先生は一九四八年から長く東京外国語大学で教鞭を執り、アジア・アフリカ言語文化研究所の所長（一九七二—一九七四）も務めた。ハンガリー語とウラル言語学が専門で、音論に関する手堅い論文があるが、文学・音楽・フォークロアに造詣が深く、我々学生にも「興味は広くもて」「三〇歳まで専門を決めるな」が口癖だった。先生が訳した『リリオム』（岩波書店）や『ラチとらいおん』（福音館書店）は今も版を重ねている。

随筆集『ブダペストの古本屋』、『ブダペスト回想』（いずれも恒文社）に書かれていることと、先生から直接伺った話を繋げると、先生の生活は、ドナウ川右岸のブダ側にあった学寮エトヴェシュ・コレイグウムを出て、左岸のベスト側にあったブダペスト大学（当時はパーズマニユ・ペーテル大学・現在の正式名称はエトヴェシュ・ローランド大学）文学部でさまざまなクラスに出席し、大学の隣の博物館通りに集中していた古本屋の書庫に入り浸り、その日にもにした本をカールバチア・レストランで楽しみに眺める、といったものだったらしい。

ブダペスト大学のウラル学のレベルの高さは周知のことだが、東洋学もむかしから充実している。明治三〇年代に東洋史学の白鳥庫吉博士が留学していたほどで、以来チベット学のA・ローナ・タシユやモンゴル学のL・リゲティらをも輩出している。労働や雑事から完全に解放されて、

質の良い人文的な教養を存分に楽しめた時間は、徳永先生のその後の学問の、あるいは人間としての拡がりに決定的な影響を与えたと思われる。

ハンガリーは近世以降絶えず歴史の激動に翻弄されたのだが、先に述べた学寮も、大学も、古本屋も、レストランも全てそのまま、同じ名前で同じ場所に今も「ある」という事実には、わたしは妙に感じ入った。

菩薩になったチベット学者

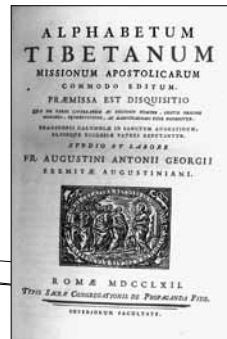
ケーレシユ・チヨマ・シャーンドル（一七八七—一八四二）はトランシルヴァニアのケーレシユ村（現在はルーマニア領）の出身で、苦学して西洋古典を修め、ゲッチンゲン大学で勉強した後には郷里で教授職が用意されていた。しかし、ハンガリーの始祖と考えられていたフン族の起源をウイグルに求めるフィールドワークを志し、職を断って陸路東に向かう。一八一九年のことである。一八二二年英国の文官W・ムーアクロフトから、A・A・ジオルジの『チベットのアルファベット』（二七五九—一七六二）を見せられ、たちどころにチベットの魅力にとりつかれた。以来一八三〇年まで主としてインドのラタク地方で研鑽を積み、チベット語文法の著述と辞書の編纂をおこなった。文法はチベットの伝統的文法学を祖述したもの、また、辞書はサンスクリット語とチベット語の対訳語彙集 (*Mañjuvāṇī* 『翻訳名義大集』) の訳であったが、欧州人が直にチベット語に接した最初の業績で、近代のチベット学はチヨマに始まったといつて過言でない。「チベット語に『受け身』がない」ことに気づいたのもチヨマである。この後はカルカッタのベンガル・アジア協会に招かれ、文法と辞書の上梓に漕ぎ着ける。協会の司書としてネパールから送られてくる膨大なチベット文献の整理をおこないながら、チベット仏教文化研究にスコープを広げていたが、ラサへ赴く途中ダージリンでマリアに倒れ、亡くなった。

七年間ラタクの僧院で、厳しい環境のもと、清貧のなかで勉学を全うしたが、その後のチヨマの二三年間をさらに生産的なものにしたことは確かだろう。質素で禁欲的な生活態度は、アジア協会職員のあいだで今も「チヨマは菩薩である」と語り継がれているほどである。余談になるが、東京国立博物館にチヨマの銅像がある。これも徳永先生に教えていただいたのだが、長らく忘れていた。アジア協会の胸像を模写したものかと思っていたが、意外にも印を結んだ僧形だった。「菩薩」なのだから、意外と思う方がおかしいのかもしれない。

東欧の地域的時間の保守性に身を委ねた体験が、ふたりの学者の学問にふくらみをもたせたと感じるのはわたしだけだろうか。



博物館どおりの古本屋



『チベットのアルファベット』初版



ブダペスト大学



『片目考—徳永康元言語学論集—』



ケーレシユ・チヨマ・シャーンドル



チヨマ銅像 東京国立博物館 所蔵